

氏名	岡(小山)綾子
学位の専攻分野の名称	博士(教育心理学)
学位記番号	甲文第176号(文部科学省への報告番号甲第583号)
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2016年3月17日
学位論文題目	知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症児に対する社会的相互交渉を促進する環境調整と指導
論文審査委員	(主査) 教授 米山直樹 (副査) 教授 松見淳子 日上耕司(大阪人間科学大学人間科学部社会福祉学科教授)

論文内容の要旨

岡(小山)綾子氏の博士学位申請論文研究は、知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症の幼児と児童を対象に、社会的相互交渉を促進するための支援方法としての環境調整のあり方について、応用行動分析に基づく実践的研究を通じてその成立基盤を明らかにすることを目的とした論文である。精神科領域の診断マニュアルであるDSM-5では、自閉スペクトラム症の診断基準の一つに社会的コミュニケーション及び対人的相互反応における持続的な欠陥を挙げており、多くの自閉スペクトラム症児は他者と相互交渉を持つことが困難とされている。そのため、特別支援学校では、知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症の児童生徒を対象に社会的相互交渉の改善に向けた教育・指導が行われている。しかしながら、教育現場においては障害特性を考慮に入れ、かつエビデンスに基づいた形での支援方法の開発はまだ不十分である。

博士論文は3部構成となっており、第1部は序論、第2部は研究群I及びIIからなる介入研究の報告、そして第3部は総合考察となっている。第1部の序論では、まず社会的相互交渉について発達心理学の観点から説明をした後に、知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症児において、なぜその成立が困難になるのかを論じている。そしてこれまで行われてきた自閉スペクトラム症児に対する社会的相互交渉の促進に関する国内外の先行研究を概観し、国内と海外の研究動向の違いについて考察している。そしてコミュニケーションに対する考え方についての日本と欧米の文化的差異を指摘した上で、国内における社会的相互交渉を促進する指導に関する研究をまとめている。その結果、共通する指導内容としては、ゲーム場面など支援者が環境を操作しやすい指導場面が用いられていること、かつ実際の生活場面への般化を念頭に置いた模擬場面における指導が中心であることを明らかにした。この結果を踏まえつつ、応用行動分析の視点に基づき社会的相互作用を成立させるための環境設定の操作による行動支援を行うことの有効性を論じた上で第2部の介入研究に結び付けている。

第2部のうち、研究群Iでは特別支援学校という学校教育場面における2つの実践研究がまとめられている。研究I-1では、ストラックアウトゲームという場面を用いて、プレイヤーだけでなく、補助者の役割を各参加児童に与えることにより社会的相互交渉が高まることを示した。そして研究I-2では朝の会活動においても司会や報告者といった役割を各参加児童に与えることで、高い従事率と正反応率を示すことが可能であることを示している。これらの結果から、社会的相互作用を成立させるためには、相互交渉の相手の行動が弁別刺激として機能すること、活動内容が行動連鎖していること、自発的に援助要求できる手がかり

を用意すること、従事率の高い活動を選択すること、という4つの条件が重要である可能性を見出している。しかしながら、これらの結果は学校教育場面という環境統制が不十分な状況における結果であるとして、より詳細な分析が必要であることを自ら指摘している。

これら特別支援学校という現場研究の限界を踏まえ、続く研究群Ⅱではより統制された研究を行うために大学附属のプレイルームにおいて、知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症児に対する個別指導場を設定し、5つの研究を行っている。

研究Ⅱ-1では、2名の対象児に対し、幼児が触れる機会の多い遊具である積み木を使用して他者と交代で積み木を積む行動を成立させることを目的とした介入を行っている。自閉スペクトラム症児は積み木を積む行動自体は成立がしやすいものの、他者と交代しながら共同で事物を作成することは比較的困難な場合が多い。介入では、積み木を1つの皿の上に置いておき、その皿を順番に交代することで、共同で積み木を積む行動の形成を目指し、環境調整の効果について検討している。

研究Ⅱ-2では、2名の対象児に対し、キャッチボールの活動を成立させるための環境調整について検討している。キャッチボールはボールのやりとりを通じて他者との相互交渉を模式的に表す活動であり、行動が相手に向けられ、投げる・受けるといった役割交代が求められるコミュニケーションに近い活動である。その一方、活動の終了といった見通しが不明確であり、自閉スペクトラム症児にとっては困難な活動ともいえる。介入では、キャッチボールの回数分のボールを用意することにより、対象児の従事率を高めることが可能となり、介入の有効性が確かめられた。

研究Ⅱ-3では、2名の対象児に対し、他者の行動を弁別刺激として共同作業を行うことが可能となるかを検証するため、ボールを入れた籠を共同で運ぶ場を設定し、介入を行っている。この活動は他者の行動に合わせて自らの行動を調節する必要があるため、活動の従事率の他に、対象児の視線も分析対象としていたが、活動の従事率が高まるにつれて、視線の向きも相手に向けられる傾向が認められた。また、自然観察場面でも般化が認められている。

研究Ⅱ-4では、2名の対象児に対し、的当てゲームを用いて他者とのやりとりを伴う遊びの成立と維持を目指した介入を行っている。的当てゲームは広く市販されており、ボールや的の大きさを調整することも可能で、特別支援学校でも導入が容易な活動だと考えられる。介入では、ボールを投げるという役割だけでなく、もう一方には的を持つという役割を設定することで正反応率の上昇と逸脱率の減少という結果をもたらすことができた。

最後の研究Ⅱ-5では、2名の対象児に対し、椅子取りゲームを用いた研究を行っている。自閉スペクトラム症児は同時に複数の要素からなる刺激に対して適切に反応することが困難とされているが、椅子取りゲームは他者の行動と音楽という2つの刺激に対して反応することが求められる一種の条件性弁別ともいえる活動である。介入の結果、2名の対象児とも正反応率が上昇し、うち1名は通常のルールへの般化も認められている。

第3部は総合考察から成り、知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症児に対する社会的相互交渉を促進する環境調整と指導における必要な要因について整理し、特別支援学校における教育指導内容への展開の必要性について論じ、博士論文をまとめている。

論文審査結果の要旨

岡(小山)綾子氏の博士論文研究は、発達障害の中でも代表的な障害である自閉スペクトラム症を取り上げ、その中核症状である社会的相互交渉の困難さに焦点を当て、その問題を改善するための支援方法として環境調整という枠組みを用いた一連の介入研究をまとめたものである。基本的に発達障害児に対する支援と

しては、対象児の発達の課題に対して訓練等により本人の能力を引き出していくというボトムアップ的な支援と、本人が現在持っている能力を最大限引き出すような環境設定を行い、最短距離で出来ることを獲得させるというトップダウン的な支援の2種類がある(井上, 2011)。前者のボトムアップ的な支援は本人に様々なスキル訓練を施すことで、環境への適応力を高めていくことを主眼としているが、往々にして訓練漬けの支援に陥りやすい点や、支援する側の負担が増大するといった批判が出されている。一方、後者のトップダウン的な支援は、支援の開始段階では、新たな環境調整を設定する必要があるという点において支援者側の負担は生じるものの、一度支援内容が確立すれば比較的安定的に適応行動を引き出すことが可能となる。岡氏が本論文で用いた支援方法はこの後者のトップダウン的な支援に当たるものであり、この環境調整の条件や要因を明らかにすることで、特別支援学校内にある様々な知育用具などの教育資源の具体的活用法を現場に還元することが可能となると考えられる。

今回、岡氏が用いた研究手法の学問的基盤は行動分析学に由来するものであり、全ての研究が単一事例実験計画法に基づいた実験デザインで組まれており、あくまでもデータに基づいた形で介入効果を検証することを目指したものとなっている。介入研究の前半では岡氏が特別支援学校に教師として勤務していた時期に行った2つの実践研究がまとめられている。学校現場において日常業務に忙殺されながら自ら実験デザインを組み、支援方法を考え準備し、小集団を対象に実践を行い、成果を挙げた点は学校現場への還元という点において、教師による教育実践活動のモデルとなりうるものである。しかしながら、岡氏自身が指摘するように、現場研究という制限から介入変数の効果を厳密に検証するまでには至っていなかった。その点を踏まえ、岡氏は厳密な実験室的研究を志向して大学附属のプレイルームにおける要因を統制した形での介入研究を行い、有効な社会的環境調整の条件について明らかにすることを試みた。その結果、学校場面での実践研究で浮かび上がった、相互交渉の相手の行動が弁別刺激として機能すること、活動内容が行動連鎖していること、自発的に援助要求できる手がかりを用意すること、従事率の高い活動を選択すること、という4つの条件の重要性が明確に確認された。これらは特別支援学校において実践活動を行う上で、非常に貴重な知見であるといえる。

しかしながら、本論文についてはいくつか指摘しておくべき箇所もある。まず本研究の主題に関する概念的定義についてであるが、たとえば相互交渉の相手の行動が弁別刺激として機能するという点については、従来行われてきた離散試行型の訓練との操作的定義の違いが不明確である。この点については、社会的相互作用という場面と机上での課題訓練場面がどのように異なるのか、より詳細な定義付けが必要となってこよう。

また先行研究との違いについて、岡氏は従来の研究は主に言語の発信と応答に焦点を当てたものが多く、またほとんどの研究が療育の流れで介入対象が決められてきたのに対し、自身の研究は言語に頼らない物理的環境調整に焦点を当てており、あくまでも社会的相互交渉を中心に据え、系統立てて介入を行っているといった点が異なると主張しているが、支援者あるいは仲間との行動連鎖を中心としたゲームを導入することが、対象となった「知的能力障害を伴う」児童にとっては適切であったと考えられる。今後はこの点をより踏み込んだ形で独自性を明確化する必要がある。

さらに、こうした研究は現場発信型の研究として、学校現場で見出された課題をより統制された条件下において検証し、かつ教師が利用可能な知見としてまとめていく作業が求められるが、その際には学校現場に還元する上での注意点についても考慮しておく必要がある。応用行動分析では学校現場等に技法を導入する上で、学校という文脈への適合性(contextual fit)と技法の有効性(technically sound)のバランスをどのように取るかが重要であるとされている。その点、本研究は学校現場で見出された課題について、その対応策に関する要素を検出することはできたが、いかにその知見を学校現場に還元していくかまでは論じられていない。それ以外にも、今回の研究は複数の事例研究をまとめる形で報告しているが、それぞれの研究成果

から導き出された様々な支援方法や環境調整といった知見に関して、より広く学校現場に還元するための検討が必要であろう。

なお、以上の諸点は、岡氏の今後の研究の展開に対する期待として述べたものであり、本論文の価値を否定するものではない。岡氏は、博士論文に含まれている主要な研究を国内および海外の主要な学会で精力的に発表しており、特に国際行動分析学会では2回の発表を行い、そのどちらもが日本行動分析学会による日本在住学生のための助成対象者として選出されている。また研究活動として自身が務めていた特別支援学校だけでなく、兵庫県内の特別支援学校にも赴き、保護者及び学校の同意を得るだけでなく、本学の研究倫理審査も受けて臨床研究を実施し、その成果を論文としてまとめている。そして自身の特別支援学校での実践研究は論文となって結実するだけでなく、具体的な実践方法として学校現場に残り、多くの教員によってその活動が継承され続けている。岡氏の今後の研究課題についても、特別支援学校における自閉スペクトラム症児に対する系統立てた支援方法の開発と教職員に対する実践および普及が挙げられよう。また口頭試問でも岡氏に対し、教育現場でのリーダーシップを期待する発言もなされていた。

岡氏は2016年1月27日および29日に博士論文の公開発表を本学F号館にて行った。審査委員会は本博士学位申請論文を慎重に審査し、1月27日の公開発表後に実施した口頭試問における結果と学会発表や公刊された論文などの諸活動から判断し、岡（小山）綾子氏が博士（教育心理学）の学位を授与されるにふさわしいとの結論に達したのでここに報告する。